

【研究ノート】

幼児期における言語教育の在り方の一考察
～ 現職教育に焦点をあてて～

三島 裕一*

A Discussion of the Language Teaching Method in Childhood
～ Focused on the Incumbent Teachers Study ～

Yuichi MISHIMA*

1 はじめに

人間にとって、言葉は単なる通信の手段ではない。ドイツの教育哲学者、ボルノーは、言語習得の意味を「その人の言語が貧弱であるか、抱負であるか未分化であるか分化しているか、混沌としているか明晰に秩序立てられているか、ぼんやりしているか、それともはっきり規定されているかは、同様にまた、それを話す人が貧弱であるか、豊かであるか、混沌としているか明晰に秩序立てられているか、ぼんやりしているか、はっきりしているか、ということである。」と述べている¹⁾。言葉は自分そのものであり、人格や品性をも表している。どのような言葉をどのように獲得し、どのように使うかによって、その人の成長の度合いが測られる場合も多い。またヴィゴツキーは、人間の心の発達には社会的な活動に起源を持って進んでいくというように考え、言語もまた精神間機能から精神内機能への移行によって獲得され発達していくものであると考察している²⁾。言葉は子どもたちの成長過程において、ごく自然に、あたりまえのように身に付くものではない。幼児期には、主に発達段階に応じた様々な活動の中から獲得していくもので、それは人間の本質の形成にも深く関わっているのだと思われる。

2 幼児期における言語活動の重要性

幼児期において、言語を用いた活動はきわめて重要である。幼児期の学びは小・中学校、あるいは高等学校のような授業中心ではなく、どちらかという生活や遊びが中心であり、豊かな遊びの中で様々な事に興味・関心を持ちながら、自分たちを取り

巻いている環境に自発的、主体的、意欲的にかかわり、多様な体験を通して学んでいく。幼児教育の祖と言われる倉橋惣三氏の幼児教育論を待たずとも、教育の第一歩は「教え」から始まるものではなく、適切な環境の中での自由な「遊び」から始まるものである³⁾。幼児は様々な遊びや仲間・保育者などとの多様な生活経験を通して、生活の中で言葉を使って様々な知識や人間関係の構築の仕方、道徳性、社会のルールなどを習得していく。幼児期には幼児の生活の状況に応じた言葉が存在し、それらを身につけ、日々の生活の中で実際に使いながら、ごく自然な形で言語活動が行われていく。その活動を日々継続していくことで、より多様な言葉を習得していくというサイクルが成立しているのである。

限られた人間関係で形成されている家庭生活から飛び出して、いままで出会ったことのない人たちとの集団生活が行われる幼稚園という場で過ごす3歳～5歳頃の時期は、親や祖父母、兄弟などに頼っている状態から自立へ向かうための、人生で最も大切な時期ではないかと考えている。であるから、幼稚園での学びはこの後、ずっと続いていく学校教育、あるいは生涯教育の基本中の基本ではないかと考える。

さて、それでは幼稚園ではどのような言語の教育が必要なのか。藤永等は虐待を受け続けた姉弟が、発見時5歳、6歳に達していたにも拘わらず、体位は1歳以下にすぎず、言葉も全く発しなかったことを報告している⁴⁾。現在、乳幼児期に保護者が放任していた子どもは押し並べて言語力が低くなっていることがわかっている⁵⁾。この

*知内町立知内幼稚園 園長

ことから、幼児期の言語力獲得にはいかに環境が重要であるかということがわかる。自由闊達に遊ぶための優れた環境があって、意志を通じあえる仲間や保育者がいて、遊びや生活の中で周囲の人とかかわり、トライ&エラーを幾度も繰り返しながら獲得されていくものなのである。つまり、幼児期といわれる数年間では、主に体験の中から生きた言葉を学んでいく時期なのだと考えられる。

幼稚園で遊びに夢中になっているときに、自分の考えを動作や表情だけではなく自分の言葉で友だちへ伝えたり、友だちの言葉を直に聞いたり、その中で時には言い合いやトラブルに遭遇しながら、それらを乗り越えることで成就感を味わうことができる。しかし、次の日には又挫折し、新たに試み、また成就感を味わう、というような幼児期に必要な体験を日々繰り返しながら徐々に会話の質を高めることによって、今度は遊びの世界がいっそう広がり、人との繋がりも広げながら、言葉の世界がより深くなっていくのである。つまり、遊びを基盤とした幼児期の学びは、教科という枠を超えて様々に交差し合う、複雑で深い学びとなるのである。これらが幼児期ならではの学びと言われるものであり、日々の豊かな遊びの中から自由で、自然で、多様な、言語を獲得していくためのベースになると考えられる。

3 「生きる力」の礎となる幼児期の言語教育

幼稚園教育の根幹は、「生きる力」を育てることにある。平成 30 年度改訂の『幼稚園教育要領』第 2 章では、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期に育ってほしい姿」を提示している⁶⁾。

まず、資質・能力とは、

- (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の習得」
- (2) 気付いたことやできるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現する「思考力、判断

力、表現力の基礎」

- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

また、育ってほしい姿とは

- ① 健康な心と体
- ② 自立心
- ③ 協同性
- ④ 道徳性・規範意識の芽ばえ
- ⑤ 社会生活との関わり
- ⑥ 思考力の芽ばえ
- ⑦ 自然との関わり・生命尊重
- ⑧ 数量や図形、標識や文字への関心・感覚
- ⑨ 言葉による伝え合い
- ⑩ 豊かな感性と表現の 10 項目となっている。

『幼稚園教育要領』の領域「言葉」では、「経験したことや考えたことを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」とある。

その狙いとしては

- (1) 気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう
- (3) 日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせるとなっている。

「言葉」の領域では、

- (1) 自分の思ったことや感じたことを相手に伝え、表現する楽しさ、相手に伝わる成就感を味わうという表現への意欲
- (2) 先生や仲間たちの言葉について、主体的に興味関心をもって聴く態度

を育てることが求められる。これらを日々の活動の中で積み重ねながら、よりいっそう多様な言葉の世界に接することで、より豊かな言語感覚、言語活用の能力を育てていくことが求められているのである。

この領域では、子ども達が日々の生活の中で自分の思いや考えを言葉で表現し、自

分らしさ表現する中で、自分以外の人の言葉も受け止めながら、さまざまな語句や言い回しを身につけ、これが良い形で上昇する螺旋形を描きながら、よりレベルの高い言語スキル、コミュニケーションスキルを身につけてしていかなければならない。小学校就学後の言葉の学習は、主に国語科において担うことになるが、幼児期は生活や遊びの中で体験を基盤として言葉を学んでいくのである。その中で、幼児が獲得していく言葉や、生活していくために必要な言葉、生きて働く言葉をしっかりと獲得し、それを育てていくことが重要だと考える。

相手にわかるように話そうとする気持ち、相手を思いやる心を大切にしながら、幼児は生活の中で繰り返し言葉のやりとりを経験したり、絵本や物語に多く接しながら自分の経験を言葉で表現するとともに、相手の言葉をきちんと聴こうとする態度を育み、それらによって言葉のもつ豊かで広がりのあるイメージが持てるようにしていくことが大切である。

大人はもちろん、幼児期の子どもにとって自分の言葉で話すこと、他の人の話を聴くこと、そして言葉で自分を表現することは、思いを相手に伝え、人との関わりをもつことの楽しさを味わうことと強く結びつき、一段高いレベルのコミュニケーションへ向けて意欲を高め、より高度なコミュニケーション力を育てていくための原動力となるものである。すなわち、3～5歳の時期に幼稚園で多くの人と関わり、活動し、創造的な遊びを広げていく中で、幼稚園教育の根幹である、「生きる力」の基盤を形成していくのである。

実際に幼稚園で活動する幼児を見ると、集団の中で楽しげに、さほど緊張した様子もなく話す園児もいるにはいるが、大多数は大勢の前で話すのが苦手であり、緊張したり、言葉が拙いためにうまく遊びの仲間に入ることの出来ない幼児や、入ったとしてもうまく関係を作ることの出来ない幼児、困っていても自分の思いをうまく相手に伝えられない幼児、話を聴く態度や技術が身につけていない幼児が見うけられ

る。この様子を見てみると、豊かな言語力を獲得することによって話すことや聴くことがより楽しく感じられ、このことから人と関わるのが楽しいと感じることが、人間関係を構築する上で大切な基盤となっていることがわかる。つまり、言葉で相手に伝え、言葉で相手の思い受け止めていくことへの意欲、興味・関心、コミュニケーションのスキルの向上は、幼児期からの学びの重要な土台となっていることがわかるのである。

さて、幼児が生活の中で、思いや考えを言葉で表現したり相手の話を受け止めようとする態度を育てる重要な要素として、教師をはじめとした大人の存在がかなり大きいのではないかと考えられる。特に教育という場で幼児と接する保育者は、幼児一人一人の発達や特性を十分理解したうえで、子どもに安心感を持たせるための信頼関係を築くことを前提として、さらには自分が幼児にとっての大切な言語環境であることを意識して、豊かな言葉、美しい言葉、正しい言葉で接していくことが重要であると考える。言葉の学びというものは非常に独特なもので、理論的に学ぶこともなくはないが、その多くは日常生活の中で習得していくものである。一例を挙げれば、アメリカで生まれ、アメリカで育った3歳の子どもの方が、経験や知能が上回っているが、英語をあまり使ったことのない成人よりは、はるかに込み入った英語を駆使してコミュニケーションをとることが出来る。すなわち、英語に限らず、言語の習得というものは生活の中で実践的に行われることが常であり、知能や知識とは又別の次元で発達していくものなのだと考えられる。

幼稚園教育で保育者は、幼児をさまざまな活動に主体的に取り組ませることによって、言葉にしてみたくなるようなイメージを創り出す経験や、仲間と感動や楽しさを共有し、言葉で表現したり一緒に考えるなどの多様な体験を生み出す環境を創り出すことが必要となってくる。幼児の言語の育ちを促す要素として、発達段階に応じた様々な素材、たとえば、絵本、紙芝居、ペー

プサート、マペットなどを効果的に用いることで、幼児の興味関心を広げ、新たな言語的刺激を与えることができるし、さらにはこれらを教育課程に取り入れることによって、発達の度合いや個々の特性を確かめながら、より計画的に言語活動を促すことが出来るのである。

4 言語環境としての幼稚園

幼児の言語習得のプロセスは、ほぼ周囲の大人の言語活動から得た経験による。幼稚園では、係・当番の活動や朝の会・誕生会でのスピーチ、司会などの活動を通して、大勢の前で、幾つかの条件の中、言語活動のお手本の形式を学んでいく。それらを経験しながら、少しずつ自分の個性を出す話し方を身につけ、他の人と少し違ったやり方、話し方で表現するようになる。ただし、これらはいくまでも公式に則った話し方であり、思いや考え、感性を表出するものではない。ただ、人前で話すことは、言葉の選択、音量、間の取り方、速度などを実践的に学べる場であり、大切な経験となる。それらを交えながら、実際にはインフォーマルな場での自由な対話、会話をすすめていくのであるが、係活動などのフォーマルな言語活動と違って、自由度が増し、応用力が求められる。その分、手本のない、自分で考え判断しながらの活動になっていくので、かなり高度な言語活動となっていく。その場合のお手本は、家庭では兄弟や親、幼稚園では教師との会話になってくる。子どもたちは幼稚園での活動の様子をお家で家族にお話しすることが多いのだが、それと同じくらい、お家のできごとを教師や友だちにお話しする。その時、会話に加わった保育者や家族は、子どもとの会話の中でその子の特性を考えたり、言葉の発達の度合いを測ったりしながら、子どもの話す内容を補い、押し量って受け止める。それによって、話し手である子どもは、拙いながらも一生懸命話そうとするし、相手に自分の話したことが受け止められているという実感を得ることができ、さらに会話しようという意欲が増していく。このような、

相手になる保育者や家族の支えによって、子どもたちの話す技術が向上するばかりでなく、話したい、話すことが楽しいという意欲や、話したら答えが返ってきた、いろんな事が分かったという成就感、達成感、満足感も得ることができ、それが次の言語活動へと歩を進める新たなエネルギーになっていくのである。子どもたちは幼稚園という場で、保育者を介して大人との言語コミュニケーションを学ぶことができるが、保育者は積極的にその役を担っていくことが大切になってくる。また、大人に絵本や物語などを読んでもらうなかで、書き言葉の表現にも親しみ、お話をきちんと最後まで聴く習慣が身につくことで、言語を現実から一旦遠ざけて、お話そのものを理解しようとする経験を積み重ねていく。残念ながら、家庭における言語環境は多種多様で、それによって子どもたちの言語の発達にはかなりの差が出てきている。その差を埋めるのも教育の場としての幼稚園が担っていかなければならない。幼稚園での読書活動には限りがあり、家庭との連携協力が欠かせない。保育者は積極的に保護者へ働きかけ、家庭での読書環境の改善にも努めるべきである。これによって、例えば、長期の休業中などにも、途切れることなく読書を介した言語活動の継続が期待できるのである。

さて、言語活動の大半が幼児同士のみだった場合を考えてみよう。筆者の勤務する幼稚園の子どもたちを見ていると、どうしても話すと言うことに囚われ、そこにのみ集中してしまいがちである。ましてや語彙が少なく、話す技術が未熟な者同士の会話では、意思疎通がままならず、行き違いが多くなって会話として成立していないことの方が多そうだ。結果、お互いに不満がたまり、会話を止めたり、言い争いにつながっていくこともある。であるから、実際に子どもたちが言語活動を行うときには、未熟な段階においてはまず保育者や大人が仲介役となり上手に補助しながら、子どもたちが自分で会話し、意志を通じ合い、成就感を味わうことができるように適切にア

シストしていく必要がある。大人、特に幼稚園の保育者の果たす役割は大きいと言える。子ども同士の場合、子どもたちが複数いる場では様々な形態の会話が生まれる。人数が多ければ多いほど会話の数やバリエーションは多様になる。しかし、子どもだけでの会話、特に年少クラスなどの会話では、一語、あるいは二語程度の会話も多くなり、なかなか伝達のための言葉として機能していない。わりと簡単な言葉でも通じる場合もあるが、言葉足らずで誤解が生じ、細かなニュアンスは伝わらない。したがって、言語を用いないコミュニケーションが生まれる場面も多く見られる。2～3人の子どもの前に好きなおもちゃがあった場合など、言葉で、「ぼくは〇〇を使います」と言ってから使う子はごく希である。多くは、言葉を発すると同時に、あるいは言葉の前に行動を起こす。これが続き、自分の思いが叶えられることによって、「言葉で伝えるより行動を起こす方が目的達成のために有効である」という意識が生まれ育ち、言語外コミュニケーションの方が素速く効果的であると考えてしまう。これは年少クラスに限らず、年中、あるいは年長でさえも、言語力が思うように発達していない場合、同じような場面が見られる。したがって、保育者は、言葉を用いた正しいコミュニケーションの仕方を伝えながら、成功を褒め、間違ったやり方をした時は別のやり方を試みさせたり手本を示すなど、様々な方法で伝わる喜びを味わわせながら、正しいコミュニケーションの方法を身につけさせていくことが大切になる。非言語的コミュニケーションのみではお互いの意思の疎通が不十分であることを実際の場面で知らせていくことが、幼稚園として、保育者として重要な役割であると言える。

幼稚園の言語活動の中でもう一つ重要なものは、絵本や物語の読み聞かせである。幼児にとって絵本の世界は、現実の生活にある具体的な場面ではなく、ことばや挿絵から生みだされる豊かで広がりのある想像の世界になっていく。これまで彼らが経験したことのない、深い森の中、愛らしい動物

の家族、遙か遠くの異国、大空を飛翔すること、宇宙に散らばる星々等、これらは幼児の想像性を育む機会であるとともに、文字文化と多様な語彙、豊かな表現に触れるために欠かすことのできない教育の一環である。子どもたちにとって難しい言葉でさえ、教師の語り口と挿絵の補助的機能によって咀嚼し、自分のものにしていける。例えば、「広い野原に立っている一本の樫の木の上に、しんしんと雪が降り積もります。」というフレーズを読んだとき、「樫の木」「しんしんと」が子どもたちの引き出しにストックされていない。しかし、前後の関係、その後の展開などから想像して、言葉としては難しくても、なんとなく雪は吹雪でもなければ粉雪でもない、ゆっくりと音もなく降り積もってゆく雪なのだということが理解できるのである。大人が規制線を勝手に張り巡らすことで、子どもたちの豊かな想像力が育っていくのを阻止しているのかもしれない。「どっどどどど」「だーすこ、だーだーすこすこ」「のんのんのん」など、宮沢賢治のあの独特のオノマトペ⁷⁾は、もちろんこれまでに出会ったことがない独特の表現だろうが、童話を読む子どもたち、読み聞かせに聴き入る子どもたちにすんなりと受け入れられるのである。このことにより、言葉が子どもたちに身近なものとなり、文字や絵本に興味を持って読書に取り組む態度を養う事にも繋がっていくのである。さらには、幼稚園での遊びの中に、ことば遊びを取り入れることもたいへん有効である。しりとりやあたまとり、なぞなぞ、だじゃれあそび、かるたなどの言葉遊びは、ことばや文字の習得に必要な音韻意識の発達を促したり、親しみを感じ、次への意欲につながっていく。幼児期にはこのような豊かな言語環境において遊びと生活の中で多様な言語経験を重ねていくことが望ましいと考えられる。

5 幼児期の特性と幼稚園での教育

幼児は、身に着けた言葉で周りの環境(保護者・先生・友達)とコミュニケーションをして、気持ちを通い合わせる。またこの

経験を日々の生活で生かし、人とのかかわりも深め広げていくことができる。そのような営みを大切にしているのが保育の現場なのである。音声を伴った話し言葉はもちろん、言葉にならない表情や行動もこの時期の言葉の一つとらえていいのではないだろうか。幼児期において、言葉にならない言葉はとても重要なものであり、幼児期の特性でもある。

幼児は言葉を覚えたからといって、うまくその思いを言葉で表現しているとは限らない。

だから、その思いによりそった援助が必要になってくる。

たとえば、「先生、ぼく 冬休みに 東京へいく」と教師に伝える。教師は、「よかったね」と共感した上で、「誰といくの?」と問いかける。「んとね、パパとママと〇〇ちゃん(妹)と、おじいちゃんとおばあちゃん」「そう、楽しみだね」。続けて、「お正月は帰ってくるの?」と問えば、「うん、お正月も東京にいる」と答える。教師が子どもの会話を受け入れ、子どもが安心して心の内を表出できるように、質問の形を取りながらサポートしていく。このことで、子どもは、自分の心の内にあって、しかし自分の言語力では到達できない部分でも意志を表現することができるようになるのである。

幼稚園教育要領の中の「言葉」は五領域の一つであり、単独で存在するものではなく、「健康」「人間関係」「環境」「表現」の各領域としっかり関連していることは言うまでもない。各領域に示された様々な内容が幼児期の特性や個々の特性と関連しながら相互に影響して教育がすすめられていくのである。

幼稚園生活の中で、教師や友達とのかかわりを深めていき、信頼関係を構築しながら仲間や教師とかかわることで、言葉は次第に活発になり、さらに幼児の世界を広げていく。自分の思いを自分なりの言葉で表現できたとき、相手がそれに応じてくれたとき、満足感や楽しさを感じ、もっと伝えたい、他の人の話を聴きたいという気持ちが

がわき出てくる。

その気持ちが感動を生み、その感動が言葉につながるという上昇のスパイラルを描きながら子どもたちは成長していくのである。幼稚園で生活する子どもたちを見てみると、日々の多様な体験があつて、言葉が生まれてくることがわかる。

幼児にとって言葉はふだんの生活の中に常に存在する。小・中学校のように、授業で、教科として扱うのではなく、遊びや生活のなかで楽しみながら言葉のやりとりを行う事が大切なのである。子どもたちが話すことに対して意欲的になるためには、楽しいという要素が必要であり、その環境を作っていくのが保育者の役割である。もし話すことが苦痛になるような、堅苦しく、自分を自由に表現することができないような幼稚園の教育環境であれば、言葉を豊かに育てることはできないだろう。

幼稚園における望ましい環境としては、

- (1) 心を動かし、表現したくなるような多様な体験活動が可能であること
- (2) 心を開いて言葉を交わし合うことのできる仲間がいること
- (3) 話す、聴くという経験を意図的、計画的に教育計画の中に組み入れ、実践していくこと
- (4) 絵本や、紙芝居などの読書にふさわしい教材が豊富であること

などが挙げられる。

言語環境としての教師の役割りについては、

- (1) 子どもの言葉に耳を傾ける良き聞き手であること
 - (2) 幼児にとっての良き理解者・共感者であること
 - (3) 美しい言葉の伝達者であり、良きモデルであること
 - (4) 幼児同士が言葉をやりとりする場合の良き仲介者であること
 - (5) 幼児の成長を見守り、適切な関わりができる良き援助者であること
- などが求められている。

6 言語環境としての保育者の役割

幼稚園での言語の指導は、幼児が主体的に物事にに関わり、心を動かし、友だちと協力しながら遊び生活する中で行われる。保育者や友だちに囲まれて生活する幼稚園生活では、「人と話すことや聞くこと」が楽しいと感じられる、心豊かな学びが行われるよう、様々な工夫がなされる。人と言葉で関わるのが楽しいと感じられるようになることは、まさしく「人とかかわる力の育成」そのものであり、心の育ちが期待される人間関係の基盤である。幼稚園では幼児が様々な活動に主体的に取り組み、言葉で表現したくなるようなイメージを創り出す経験や、感動や楽しさなどを共有し合ったり、共に考えたりする体験を大切にしながら指導を心がけなければならない。

言葉は、もちろん幼稚園だけでなく家庭や地域等、幼児が活動するあらゆる場面で用いられ、幼児の貴重な経験となって蓄積されていく。幼稚園では、環境を通して言葉を学んでいく幼児にとって、保育者は常にその部分を意識した言葉の環境を準備することが重要になってくるし、それが子どもたちの言葉を豊かに育てる保育につながっていく。

つまり、言葉が幼児の生活のベースになるような環境構成が求められているわけである。

ところが言葉の指導を行うということで、「みなさんおはようございます。」「おとうばんさんおねがいします。」など、形式的な、歌うようなフレーズを繰り返す場面、「ありがとう」というと、教師は、「ございますをつけて下さい」などと正しく言いなおさせる場面や、振り返りの時間に、「今日の楽しかったことや困ったこと」を話させて、目的や解決もなく指導している場面も見られる。これらは初歩の段階で形式を覚える場合には必要なのかもしれないが、本来の言葉の学びの機会とは言えない。言葉遊び、文字遊びなどと称する活動があったり、暗記させたセリフの掛け合いを劇として発表させている場面によく出会うが、言葉の獲得というものは、雰囲気や人

とのかかわりだけでは身につかない。幼児の発達を促し、興味に即した絵本や・紙芝居・素話・ペープサートなどの教材や言葉集めや、しりとり、なぞなぞなどの言葉遊びなどを、教師が率先して、環境を用意したり、提供したり、提案したりすることから学ぶことも多いものである。豊かな言葉の環境は、効果的にこれらを組み入れた計画的な指導の工夫があつてこそ一層豊かなものになると考える。

言葉を表面的にとらえて指導するのではなく、子どもたちに新たな言葉の世界の経験を広げる場を設け、主体的に、楽しさを感じながら自由に活動できる環境の構成が求められる。

言葉は幼児の内面的かつ自発的な経験から生まれ、身についてくるものであるが、幼児の発言をすべて受け入れ、褒めることで勝手気ままな言葉の使い方を誤学習させてはいないだろうか。私たちは発表ができる幼児を育てるのではないし、言葉遊びという活動が重要なものでもない。幼児の言葉は、保護者や教師、友達など身近な人とのかかわりの中で獲得されるのである。話したい相手、安心して話せる相手がいることが大切であり、身近な大人の関わりが幼児の言葉に大きく影響を与える。また、大人がよい聞き手となり、よい話し手となることで幼児の語力、表現力が広がっていく。幼児は幼稚園や家庭での生活の中で、友達や教師や保護者の言葉や、絵本やお話の言葉を取り入れながら、言感を磨き、表現を豊かにする経験を積み重ねていく。つまり、幼児の言葉を育てるためには、生活の中で言葉の楽しさや美しさに気づかせ、伝え合うことの喜びを味わわせることが重要なのである。

幼稚園教育要領の内容項目に、「日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう」と示されており、文字を使う喜びを味わわせる指導についても示されている。幼稚園で生活する中で、幼児が文字や記号に興味関心が持てるような環境の構成に努め、それぞれの幼児が自然な形で理解できるように配慮する事が重要であるとしてい

る。幼児は日常生活の中で、話すこと、聞くことの経験を積み重ね、伝え合う喜びを味わう中で、文字の必要性を肌で感じ、文字で表現してみたいという意欲が高まっていき、文字の理解が深まると考えられる。

幼児が人に話したくなるような体験をし、自分なりの言葉で表現できた時、相手が真剣に聴いてくれたり、相づちを打ってくれたり、言葉を返してくれることで、言葉で伝え合うことが楽しくなり、言葉で表現しようと意欲が高まっていく。また、自分の気持ちが相手に伝わっていることがわかることによって、よりいっそう伝え合う楽しさを味わうことができるようになる。このような経験の積み重ねによって、少しずつではあるが、場面に応じた言葉が使えようようになっていき、さらにそれを受け止めてもらったり、褒められることで、好循環が生まれてくるのだと考えられる。

最後になるが、幼児にとっての最大の言語環境は大人であり、幼稚園においては保育者である。保育者には、その自覚を持って、常に美しい日本語、正しい日本語を使うことで、言語表現のモデルとなる役目も求められているので、保育者自身が言葉の感覚を高め、幼児の言葉を豊かにするための言葉を伝える努力をすることが大切であると考える。

7 おわりに

幼児期は子どもたちが自ら生活の中で言葉を獲得していく。子どもたちが主体的に環境にかかわり合い、家族や教師、仲間達と生活を共にする中で自然な形で言葉を獲得していくことが重要になってくる。幼い時期から、多くの人と言葉でコミュニケーションする楽しさを味わうことで、言葉への興味が増し、さらに質、量ともに充実したコミュニケーションを求めていくようになる。また、話すことを継続し、その楽しさを味わっているうちに、書くことへの興味が増えてくるようになる。これも自然な形で、豊かな遊びの中から書き言葉の特性や機能、必要性に気づくこと、記号も含めた文

字に対する興味・関心を育てることなど、さまざまに関連しながら、その時期に特有の、大人にはない素晴らしい知識欲、吸収力によって言葉の有用性、独自性、役割り、不思議さ、素晴らしさ、楽しさを知り、さらに意欲が加速していく。何でも知りたい、何でも楽しみたいというこの時期に、多くの人と出会い、豊かに交流し、言葉の力を育てていってほしいと願っている。そのためにも、大人、特に保育者は、子どもたちにとっての活動のよき理解者、共鳴する者、あこがれを形成するモデル、遊びの援助者、精神的安定の拠り所であり続けなければならないと痛感している。

8 引用・参考文献

- 1) ボルノー. 須田秀幸(訳). 新しい教育と哲学—ボルノー講演集. 玉川大学出版部. 1968
- 2) ヴィゴツキー. 柴田義松(訳). 新訳版思考と言語. 新読書社. 2001
- 3) 倉橋 惣三. 育ての心 下. フレーベル新書. 1989
- 4) 藤永保他. 人間発達と初期環境. 有斐閣. 1987
- 5) 友田 明美. 子どもの脳を傷つける親たち NHK出版新書. 2017
- 6) 文部科学省. 幼稚園教育要領. 文部科学省. 2017
- 7) 栗原 敦他. 宮沢賢治のオノマトペ集. 筑摩書房. 2014